みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第811号（通巻1315号）

東京YMCA

4
2024

創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田２－３－18
日本キリスト教会館６階
Tel　03-6302-1960
URL　http://tokyo.ymca.or.jp
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷 淳

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

VISION2030を基本に「あるべき姿」の実現に向けて歩み出す

公益財団法人東京ＹＭＣＡ総主事　菅谷　淳

２０２４年度が始まりました。新年度も東京ＹＭＣＡをよろしくお願い申し上げます。

元旦に発生した能登半島地震により多くの人々が家を失い大切な人を亡くし深い悲しみの中にあります。上下水道などライフラインの復旧の遅れや高齢な方が多い地域ということもあり、復興がなかなか進まない中、全国のＹＭＣＡでは交代で２か所の避難所のサポートに入ってきました。東京ＹＭＣＡも輪島市の町野地域避難所へ、事業の垣根を越えて延べ31人を超えるスタッフを派遣しました。苦しんでいる方々と寝食を共にしてわずかでも心の痛みに寄り添い、微力でもできることから力になりたいと考えています。

さて、東京ＹＭＣＡは２０３０年に創立１５０周年を迎えます。今年度は６年後の２０３０年に向けて私たちが目指す理想の社会と東京ＹＭＣＡのあるべき姿を考え、その実現に向かって準備を始める重要な年度にしたいと思います。まず、一昨年、世界ＹＭＣＡ大会で採択された私たちの行動指針「ＶＩＳＩＯＮ２０３０」を基本スキームに、東京ＹＭＣＡの全ての運動、活動、事業、プログラムを点検、整備し、第１期（２０２５-２０２７年度）中期３カ年計画を策定する準備を始めます。

皆様のご協力、ご支援をよろしくお願いいたします。

〈2024年度　東京ＹＭＣＡ運営基本方針〉

1.Community Wellbeing **「かけがえのない命と健康な社会のために」**	・イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神に基づいて、東京ＹＭＣＡの全ての運動、活動、事業、プログラムを通して、自分と隣人の命、心身の健康を大切にすること・青少年を育成する。 ・東京ＹＭＣＡの地域活動を活性化し、多様性が認められ全ての人に開かれた安心できる居場所を提供する。
2.Meaningful Work **「誰もが夢を実現できるＹＭＣＡになるように」**	・東京ＹＭＣＡに連なるボランティアとスタッフが、ＹＭＣＡで働くことに喜びを感じ、夢を語り合い、生きがいとやりがいをもって有意義なＹＭＣＡ運動と活動に従事できるようにする。そのために世代を問わず権限を委譲し組織風土や既存の制度、ルールを大胆に改革する。 ・東京ＹＭＣＡを構成する全事業、プログラムが提供している社会的な事業価値を明確にして、それに賛同する団体・大学、企業、行政などと連携したパートナーシップを構築する。それにより新しい公益協働ネットワークを展開するとともにYMCA運動の拡大を図り、新たなニーズにも対応する新規事業の開発につなげる。
3.Sustainable Planet **「持続可能な地球のために」**	・東京ＹＭＣＡの会員とスタッフ一人ひとりが地球の保護と再生のためになすべきことを学び行動し、人類が自然と調和して生きることの大切さを提唱する。 ・全事業部で気候変動による環境問題とクリーンエネルギーについて課題を抽出しその解決のために具体的な行動計画の策定や新しいプログラムの構築を行う。
4.Just World **「誰も取り残されない平和な世界のために」**	・国籍、年齢、性別、信条、職業、障がいの有無に関わらず、東京ＹＭＣＡに連なる全ての人が、地域や社会、世界をより良くするために活躍できるようにする。 ・支援を必要とする世界各地のＹＭＣＡとパートナーシップ契約を結び、公正で平和な世界をつくるＹＭＣＡ運動の拡大を目指す。 ・多様な人たちを包括的に受け入れていくため、東京ＹＭＣＡの全事業、プログラムの社会的訴求力を前面に出し、募金や寄付、補助金や助成金を増強する。

「VISION2030」とは

2022年７月の世界ＹＭＣＡ大会で採択された、2030年に向けて世界のＹＭＣＡが一致して掲げる行動目標。下記の「４つの柱」で構成される。このビジョンにそって各国・地域のＹＭＣＡがそれぞれの社会的文化的背景を尊重しながら地域課題に取り組み、社会へ大きなインパクトを与えることを目指す。

1.Community Wellbeing―心と身体の健康のために
2.Meaningful Work―やりがいのある仕事と環境の創造
3.Sustainable Planet―持続可能な地球のために
4.Just World―公正な世界の実現のために

各事業部の計画概要

各事業部の計画概要をお知らせします。
「４つの柱」に基づいた各事業部の運営方針は２面をご覧ください。

A．ウエルネス事業部

多様な社会の課題に向き合うことのできるスタッフ、指導者、学生、ボランティアの育成に力を注ぎます。様々なボランティア活動へ参画を促し、社会に求められている人間性豊かで優秀な指導者、保育者を育成します。

事業部の強みを生かしながら拠点での働きも大切にし、会員や関係者と協働しながら地域のニーズに応えられるよう取り組んでまいります。

（統括　松本竹弘）

B．国際・総合教育事業部

国際・総合教育事業部は、変化し続ける多様な未来社会に向けて、教育、能力開発、文化体験を通じて人々の生活を豊かにします。

To enrich the lives of people through education, skills development and cultural experience and ensure society is prepared for a diverse and ever changing future.

（統括　松本数実）

C．地域福祉事業部

一人ひとりが生きやすく、ありのままの自分でいられる心地よい居場所づくりと、人材の育成を目指していきます。昨年度より南センターや西東京センターを拠点として新たに居場所事業として進めていた外国にルーツを持つ子どもたちの支援事業も「多文化共生スペース▽（さんかく）」という名称のもと、若者や子どもたちの居場所として今年度本格的にスタートしていきます。

（統括　岡田ナスカ）

D．教育・保育事業部

「子どもが愛されていると感じる保育を実践する」教育・保育の営みで最も大切にしていることです。ＹＭＣＡの幼稚園・保育園・こども園は地域の子育て支援の拠点となり、神さまに支えられて子どもを愛おしむ役割が与えられています。人と人がつながる出会いの場となり、子どもを中心として全ての人の安心と希望を支える営みを重ねていきたいと考えています。一人ひとりのいのちが輝く平和な社会を願い、良質な教育・保育を推進してまいります。

（統括　齊藤希世）

赤▽三角

私がＹＭＣＡに入職して３年後の阪神淡路大震災では、神戸ＹＭＣＡを中心とした被災地での活動、ボランティアの取りまとめなどが高く評価されたと聞く。熊本地震では、熊本ＹＭＣＡが指定管理者として運営する体育館が避難所となり、被災者に寄り添う運営を行った。それらの実績から、能登半島地震でもＹＭＣＡの力が必要とされた。▼日本では阪神淡路大震災以降急速にボランティア意識が高まり、災害が起こるたびに多くの善意のボランティアが集まる。一方で混乱も避けられず、被災地ではボランティアのリード役が必要である。その働きは経験があってこそできる技であろう。【あなたがたは地の塩である】（マタイ５章13～16節）被災地での働きは人々にはっきりと見えずとも、地の塩のように確実に貴重な働きである。▼私も２月に輪島市の避難所支援に赴いた。一般のボランティアはいなかったが、避難者の皆さんと共に過ごした日々は忘れがたい。その経験が生かされる時は来ないほうが良いのだが、いつかその日が訪れるならば、ＹＭＣＡの先達に倣い困難の中にある人たちに手を差し伸べようと心に誓っている。（芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ　池邊照彦）

〈各事業部の運営方針〉

１.Community Wellbeing「かけがえのない命と健康な社会のために」

Ａ．ウエルネス事業
・野外活動を通して豊かな自然と多様な生命に触れ、命の大切さを感じる機会を多く作る。
・地域との繋がりを構築し、地域が活性化していくための協働事業に取り組む。コミュニティーサービスの実施や、地域に存在するリソースの有効活用など。
・ＹＭＣＡの活動を支えるユースボランティアリーダーの育成に力を注ぐ。
・社会体育・保育専門学校では、スポーツ指導者、保育者を志す、すべての若者たちの全人的な成長を願い、社会に求められている人間性が豊かで優秀な指導者、保育者を育成する。
・全国のＹＭＣＡと協力し、夏季にウォーターセーフティーキャンペーンを積極的に展開する。また、一過性の取り組みではなく、通年の水泳クラスでも水上安全に関する知識と技術を身につけられるよう指導をしていく。

Ｂ．国際・総合教育事業
・Happiness：全ての学習者、会員、スタッフが幸せで笑顔あふれる環境を目指す。
・Self Care：自分自身やスタッフの心身の健康を保ちながら業務に取り組み、健全なスタッフ体制を整える。

Ｃ．地域福祉事業
・地域で生活をする全ての人たち、またそれを支える私たち一人ひとりが、それぞれのwell beingを大切にし、生きがいを感じ、共に助け合いながら前向きに生きていけるための場を提供する。

Ｄ．教育・保育事業
・子ども・家庭・地域の方々が、互いの存在を尊重し合い、愛されていると感じることができる場を提供する。
・一人ひとりのいのちの輝きを引き出し、共に育ち合い、育て合う保育を推進する。

２．Meaningful Work「誰もが夢を実現できるＹＭＣＡになるように」

Ａ．ウエルネス事業
・スタッフ一人ひとりにとって健康的で働きやすくやりがいのある職場づくりを目指す。持続可能な働き方を前提に、私たち自らが働き方、生活、福利厚生、学習（研修）のあり方を改善していく。
・学生一人ひとりの特徴を良く理解するよう努め、彼らの目標に向かって最良の方法で教育活動を充実させていく。教職員自身の更なるキャリアアップ、指導力の向上、働く環境の整備を進める。
・社会体育・保育専門学校とプールなどの実習現場が協力をして実習生が目標を明確にして実習に取り組めるよう共通の目標を設定し育成をしていく。

Ｂ．国際・総合教育事業
・Innovation：それぞれのプログラムに関してのマーケット調査を丁寧に行い、プログラムデータに基づき、従来のやり方・考え方に対して新たな視点や手法の導入にチャレンジする。ただ「Ｇｏｏｄ」ではなく、他者に紹介したくなる「Ｇｒｅａｔ」なプログラム提供に努める。
・Empowerment：マニュアル、規則に固執せず、自ら主体的に行動することでスタッフがやりがいを感じ、よりよいプログラムの提供につなげる。
・Partnership：世界のＹＭＣＡ、他団体と協働する。

Ｃ．地域福祉事業
・利用者や、地域、行政、ＹＭＣＡに属する人が主体的に参画できる機会を増やすと共に、一人ひとりが自己実現できるプログラムを提供する。
・事業分野を切り口とした専門委員会を作り、幅広い知見を活かして、事業ごとの社会的価値を再確認し、スタッフの専門性を高める学びと研究を行い事業の強化と新たな展開を模索する。

Ｄ．教育・保育事業
・新しいことにチャレンジしたいというスタッフやボランティアが、個々の思いを発揮し活躍できる園を目指す。
・地域の関連団体・事業部間が連携することで、子どもを中心として多世代多様な人々が継続的に交わり共に成長できる包括的な拠点づくりを目指す。

３.Sustainable Planet「持続可能な地球ために」

Ａ．ウエルネス事業
・山中湖センター、野尻キャンプ、高尾の森わくわくビレッジは、専門家を交えてＳＤＧｓへの積極的な取り組み、利用者への環境教育プログラムを実施していく。

Ｂ．国際・総合教育事業
・Accountability：環境問題について、会員やスタッフ一人ひとりが自分ごととしての意識を持ち、物質文明に過度に依存しない心豊かな生活を提唱する。
・Eco-Youth：教育の場で、環境問題、ＳＤＧｓに取り組み、学習者の主体的な地球保護に向けての行動につなげる。

Ｃ．地域福祉事業
・持続可能な施設・学校作り、また気候変動に配慮した施設・プログラム作りを積極的に推進する。プログラムに気候変動に関する教育的要素を組み込む。
・地域の関係機関・団体と共に地域防災計画を共有し、防災減災意識を高める機会を持つ。

Ｄ．教育・保育事業
・ＳＤＧｓについて子どもたちや保護者と共に考え、それを発信し、持続可能な地域づくりに積極的に参画していく。

４．Just World「誰も取り残されない平和な世界のために」

Ａ．ウエルネス事業
・様々な困難にある子どもたちのために、フレンドシップファンドを積極的に活用したプログラムを実施する。シーズンプログラムのみならず、通常のプログラムへの参加も促し定期的に継続支援をする。
・新たに障がいのある子どもを対象としたプログラムを実施する。
・社会的訴求力を前面に出し、企業、行政、団体等との協働を積極的に進めていく。
・地域社会の課題に向き合うことの出来る指導者・保育者の養成を目指し、様々なボランティア活動へ積極的に学生を派遣する。またゼミナールの特性を活かし、自主的な活動を展開し、自らも豊かな人間性、社会性を育む。
・チャイルドセーフガーディング（子どもの安全保護）の作成に取り組み、スタッフが学び、全ての人がプログラムに安心して参加できる環境を整える。

Ｂ．国際・総合教育事業
・Equality：人種、宗教、民族、年齢、職業、障がいの有無を問わず、全ての人の声に耳を傾け、誰もが活躍できるインクルーシブなＹＭＣＡを目指し、公正で平和な世界をつくる人材を育成する。
・Safe space：迫害を恐れることなく、あらゆる声が届く環境を作る。
・Philanthropy：困難な状況にある世界のＹＭＣＡの声を届け、募金運動を実施する。

Ｃ．地域福祉事業
・一人ひとりの人権が保障され、多様な考えや文化、価値観を互いに理解すると共に、おおらかに受け入れ合えるインクルーシブかつ新たな価値が創造される場を提供する。

Ｄ．教育・保育事業
・一人ひとりの人権が保障され、多様な考えや文化、価値観を互いに理解すると共に、おおらかに受け入れ合えるインクルーシブかつ新たな価値が創造される場を提供する。

Ｅ．会員部
・会費を支払う会員だけでなく、ＹＭＣＡの使命に賛同し様々な形で協力をしてくれる支援者を一人でも多く仲間に加え、また広く長くＹＭＣＡを支えてもらえる仕組みを作る。
・各事業部と連携し、その価値や方向性を共有しながら会員、ボランティア、スタッフが協力して社会の課題に向き合い発信をしていく。また必要な活動を行うためのファンドやチャリティープログラムを開発するとともに、その推進のために様々なＩＴ化を検討しチャレンジする。
・全ての事業部のスタッフが東京ＹＭＣＡの使命や価値を深く理解し、それを積極的に発信することでＹＭＣＡの活動を広め、新しい会員、ボランティア、賛同者を増やしていく役割を担えるようにサポートする。そのために、新しいコミュニケーションツールも積極的に用いていく。

Ｆ．賛助会・募金・ＦＤ室
【賛助会】
・東京ＹＭＣＡの働きが持つ社会的な価値を正しく伝えるために、ホームページをはじめとした広報ツールを刷新し、それを有効に用いて新規の賛助会企業を獲得する。

【募金・ＦＤ室】
・様々な補助金、助成金に関する必要な情報を集め、各事業部へ提供する。
・フレンドシップファンドの資金を機関紙やホームページ、各種ＳＮＳ、遺贈制度等を活用し集め、経済的に困難な子どもたちへの支援を強化する。
・国内外で支援が必要な自然災害や人道的支援が必要な事案が発生した場合には、国際部や関係部署と協働、連携し支援活動（募金活動）を実施する。必要に応じて他団体とも協働する。

Ｇ．本部事務局
【人事・研修計画】
・専門性の高いスタッフを各事業部が独自に採用できるように事業の適正に合わせた採用計画を事業部と連携して構築する
・組織力を一層強化するために効果的な研修（他部門研修・自己啓発研修）を実施する。

【予算計画】
・アフターコロナの視座に立って収支バランスの悪い事業を見極め、スタッフ配置の最適化による人件費の削減を含めてバランスを整え、全体として収支相償に近い予算計画を作成する。

【設備投資計画】
・特定資産および指定正味財産を遊休させることなく積極的に用い、施設の付加価値向上、利用者の安全性向上に資する施設整備と設備拡充を積極的に行う。
・ＩＴ計画と連動し、時代に見合った機器やソフトを果断に取り入れるとともに、経費精算にまつわる新たなシステム導入を積極的に検討し、事務作業の効率化と省力化を更に加速させる。

【ＩＴ計画】
・各部の業務をよりスムーズに遂行するためのＩＴ環境を整備し、生産性の向上、業務の効率化をさらに図る。そのために各部の課題や要改善点を把握する。
・ハンドブックやマニュアルを活用した研修を実施し、スタッフのＩＴスキルの向上を支援する。

【広報計画】
・ＹＭＣＡの活動・事業をより多くの人に届けることを目的に、事業部を超えた広報担当者グループを立ち上げ、スタッフがOne Teamとなって広報の担い手となることを目指す。
・ステークホルダーへの訴求力や利便性をより意識したホームページづくり、協働する企業・他団体のネットワークを活かしたメディア戦略づくりなど、より発信力を備えた新たな広報スタイルを確立する。

補足：中期計画の策定
・2030年をゴールとして第１期（2025－2027年度）中期３カ年計画策定委員会を発足する。
・中期計画の焦点は、リーダーシップ人材の獲得と育成、既存事業の強化と新規事業の開発、東陽町会館移転を含む拠点計画、財政の安定化とグループ力の強化、ファンドディベロップメント、会員制度の見直しなどとする。

「キッズ・イングリッシュ・コンテスト」を開催

達成感に満ちた表情の参加者

東京ＹＭＣＡキッズ英語は２月17日、通常クラスの生徒による「第12回キッズ・イングリッシュ・コンテスト」を東陽町センターで開催。10組14人が参加し、３部門に分かれて発表しました。

スピーチ部門では、好きな歌手やオーストラリア在住時の経験についての英作文を発表。暗唱部門では、テキストやお気に入りの本の暗唱。文章を何度も発音して覚えたことで、さらに英語が上達したことでしょう。自由部門では、洋楽に合わせて歌やダンスを披露。瞬く間に会場は盛り上がり、温かい雰囲気に包まれました。

帰国生、幼児、英語学習を始めたばかりの生徒など、参加者たちの英語経験やバックグラウンドはさまざまですが、「人前で発表する」という挑戦に一人ひとりが向き合いました。そして、子どもたちからは「挑戦して良かった」「緊張した」「来年も頑張りたい」という感想があがりました。

このコンテストは、英語の上達度合がわかるだけでなく、やる気や達成感、頑張りまでが伝わる場なのだなと感じました。

（語学教育　染井光優）

第９回日中韓ＹＭＣＡ平和フォーラム

アジアの平和を求めて

前列右から４人目が鈴木梨央さん

２月１日～４日、中国・上海市で“第９回日中韓ＹＭＣＡ平和フォーラム”が開催された。日本･中国･韓国のＹＭＣＡから約80人、日本からは８ＹＭＣＡより19人が参加した。

この平和フォーラムは、東北アジアの平和構築のために、過去の歴史から学び、日本・中国・韓国それぞれの社会において抱える課題と解決策を考え議論を重ねる会である。2004年から２年ごとに開催されている。

開会式では、各国の会長や理事が平和への思いを述べ、「歴史のバックグラウンドを知る」「各国の社会制度や価値観、イデオロギーの違いを理解する」「協力し合い、友好関係を築いていく」ことを共通認識として確認した。

２・３日目は、日本人が多く居住していた虹口地区へ行き、日本と縁が深い中国の小説家・魯迅の記念館や旧邸、魯迅と親交が深かった内山完造が経営した内山書店跡、朝鮮独立運動家が集まりできた大韓民国臨時政府跡を訪問した。当時の建物が今も残る街並みを歩きながら、３カ国の歴史に思いを馳せた。

また、グループディスカッションの中で、平和を実現するために今何ができるのかを話し合い、最終日にはアクションプランを発表した。各国の参加者から出た「まず、私たちＹＭＣＡが世界の平和の架け橋になりたい」「今までの平和フォーラムでやってきた取り組みや思いを若い世代にも継承していきたい」という意見に、私自身も共感した。

今回のフォーラムで、たくさんの仲間と繋がり、国を越えた友情を実感した。皆、まるで昔からの友人であるかのように笑い合い語り合った。国や文化・言語の違いは関係ない。この友情こそが「平和」だと学んだ。

（江東きっずクラブ東雲児童館　鈴木梨央）

“いじめ”のない社会を目指して

ピンクシャツデー

毎年２月第４週の水曜日に、ピンクのシャツや小物を身につけて「いじめ反対」を訴える「ピンクシャツデー」。東京ＹＭＣＡでは２月28日、子どもから大人までたくさんの人が参加して、いじめや人権について考える取り組みを行いました。相手を元気にする「ふわふわ言葉」や相手を悲しくさせる「ちくちく言葉」を考える、その日に感じた「ありがとう」をカードに書いて「ありがとうの花束」を作る、折り紙でピンクシャツを折るなど、それぞれの場所で工夫した活動を実施。また、昨年に続き、この運動に賛同した香港ＹＭＣＡも参加し、香港で「ピンクシャツデー」を展開しました。

カナダから始まったこの運動がさらに広がり、世界中でいじめのない社会が築かれることを願います。（広報室）

＊「ピンクシャツデー」の報告は、ホームページでご覧いただけます

能登半島地震

被災地に寄せる思い

東京ＹＭＣＡによる輪島市町野町の２つの避難所支援活動は、さまざまな部署から派遣されたスタッフが誠意のこもった働きを重ね、その襷をつないで行われました。ここでは、現地での活動を通して感じたことなどを聞きました。

つながっている人がいる安心感

現地責任者　芝浦アイランド児童高齢者交流プラザＭＤ　中里　敦

１月24日から２月末までの予定で始まった避難所支援を３月末まで延長し、支援を続けた。市職員の受付業務のサポートとして支援を始めたが、避難者との関係づくり、避難所の生活環境の改善も業務としてとらえ行ってきた。

避難者からは「生き地獄だった」「生きているだけよかった」そのような発災後の話をたくさん聞く。「今だから笑って話せる」と言いながら時おり涙ぐむ姿もある。そのような想像を絶する体験をしながらも今を精一杯生きる避難者たちのことを思うと、快適とは言えない避難所での生活を少しでも気持ち良く過ごせ、日常の生活に近づけるお手伝いができたらと思う。平日は仕事、休日も家の片付けなどをしながら集団生活における役割もあるため、その一部をＹＭＣＡが担うことで、心身の負担の軽減になり、避難所での生活にゆとりができる。それは、私が滞在した41日間の避難所生活の中で、避難者の表情が穏やかになり、笑い声や日常会話が増えるなど日々変わっていく様子からもうかがえた。

被災者は、これまでにない体験、避難所という不慣れな環境での生活、先の見えない不安の中にありながらも前に進もうとしている。先に進むには、人と話す、笑顔や笑い声、そしてなにげない日常会話ができる心の復興が大切。そこに第三者が関わることは、自分たちを知る人がいる、つながっている人がいるという安心感になる。避難所の多くの方々から感謝の言葉をいただいたことからも、ＹＭＣＡの必要性が実感できた。

全壊・半壊した家は２カ月以上経った今もまだそのまま。片付け、引っ越しなど人手が必要になるのはこれからである。フィールドワークなどで今回の地震を忘れない活動も必要と感じる。災害の復興には長い年月がかかる。募金活動を続けることも、災害を風化させないために重要であり、被災者の方々とつながっていくことになる。

日課の床清掃。小さなお手伝いだが、避難者の気持ちの余裕につながる

また、地震直後は、停電により防災無線やテレビは役に立たなかったそうだ。発災後は情報が断たれ、自分たちで考え行動しなければならないと気づかされた。防災・減災・災害について改めて考えることが、今回の震災を〝教訓〟に変えるのだと感じる。

生きる力と使命感を感じた

第３期派遣　グランチャ東雲ＡＤ　愛洲久美子

私が能登に派遣されたのは、地震発生から1カ月が経った時期でした。避難所で最初に目についたのは体育館の床に所々敷かれた布団で、囲いはほとんどなく、プライベートな空間は十分には確保されていませんでした。しかし一方では、衛生的なトイレと、水を循環させて手を洗える機器が設置されていて、日々環境が改善されてきた様子もうかがえました。そして私の滞在中に、間仕切り、段ボールベッド、男女別の洗濯物干場などを皆で設置し、ようやくプライベートを守る環境が整い始めました。

こうした環境改善の陰には、避難所を運営する市の職員と避難者の献身的な働きがあります。そこには地元コミュニティーの人間関係がしっかりとあり、皆さんが知恵を出し協力し合う姿がありました。例えば自宅から洗濯機と農業用水タンクを持ってきて洗濯ができるようにするなど、都会の人間にはとてもまねできない生活力があり、感心するばかりでした。口腔ケアに尽力する地元の歯科医、早朝からトイレ掃除をする女性など、そこには自分たちにできることで避難者の健康を守りたいという使命感が感じられました。私たちの活動は、そうした皆さんのささやかな手助けでしたが、私自身はトイレ掃除や環境整備をするうちに、安全で衛生的な空間を保つことは、ここで生きている皆さんの尊厳を保つことなのだと感じるようになりました。それは避難者の生きる姿勢や人柄に触れたことで生まれた感覚だったと思います。

避難者の自宅から避難所に運ばれ、設置された洗濯機

能登の皆さんにもう一度穏やかな日常が戻りますようにと心から願ってやみません。

祈り続けよう

第５期派遣　高等学院ＡＤ　上瀧徹也

町が大きく揺れた日から1カ月半、現地では未だ上下水道が復旧せず自衛隊からの給水を利用する不便な生活が続いていました。避難所生活にも慣れてきた一方、日ごろ感じている不安やストレスに加え、「自分の時間・空間」が保たれないことや他者への気遣いによるストレスが増加している様子もありました。しかし、そのような中でも皆で支え合い協力し、努めて笑顔をつくり前に進もうとする皆さんの姿には心を打たれただけでなく、人の生きる力と強さを感じ、反対に勇気づけられました。

現地の状況、皆さんの様子を見ながら私から声をかけることを想定して避難所に入ったのですが、到着時から被災者の方々や関係機関の皆さんが気軽に声をかけてくださり、これまでＹＭＣＡの仲間たちが愛と努力によって信頼のバトンを大切に繋いできたことを肌で感じ、その関わりと継続の意味を実感しました。

「困った時はお互い様」ありふれたフレーズかもしれませんが、その文化が支える共生の社会。私たちは日々そのようなことを自然と行動へ移せる団体でありたいですし、それこそが私たちの使命の根底にあるものなのかもしれません。

現地で私たちの役割・使命が見つかり、一人ひとりがつながり人と人とを繋げていく、そしてこれからどう良くしていくかをフェーズに合わせて模索し、柔軟な支援を継続する。風化させないために皆で発信を続けることが復興への力となります。「何かしたいけれど、自分に何が出来るのか」というもどかしい気持ちを抱えている方もいると思います。現地へ出向いての支援、募金は大きな力となりますが、「祈り」は内なる思いを形にし、人々の心に届き強い支援となり得ます。復興に向けて、これからも組織・個人で支援・祈りを続けて行きましょう。

何気ない日常を送れることに改めて感謝しつつ。

支援活動の詳細はホームページで。第２次支援募金を実施中